十二月の織姫

景雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十二月の織姫

【Ｎコード】
Ｎ８１６２Ｚ

【作者名】
景雪

【あらすじ】
美紀は都内の上場企業に勤めるＯＬ。そう遠くはない実家に帰省した際に、母のせいで元恋人の崇を思い出してしまい、苛々が募る。美紀は都内のアパートに戻る前に祖母が入居するグループホームに寄り、祖母が書いた短冊を見つける。そこには、亡き祖父を想って書いた祖母の言葉が記されていた――

星に願いを

「あたし、五時には帰るよ？　明日仕事だし」
美紀はそっけなくそう答えた。年末の繁忙期で業務は多忙だ。
「分かってるわよ。でもおばあちゃんには会っておきなさい」
母は一旦言葉を切って、ゆっくりと続けた。
「寒くなると、年寄りは体調を崩すから。おばあちゃんは九十を過ぎてるのよ？　もう何回会えるか……」
正直に言って、美紀はうんざりしていた。祖母のことが嫌いなわけではない。けれど、実家に帰る度に祖母の入居するグループホームに行かされるのは、義務以外の何物でもなく嫌気がさしていた。
「今会っておかないと……」
「分かってるって。言わなくても分かってるよ」
母の言葉を遮り、美紀は語気を強く言葉を放ったが、苛立ちをそのまま出してしまったことを後悔した。内孫の美紀は十八まで祖母と一緒に暮らして可愛がってもらった。恩も十分感じている。そんなことは分かっている。分かっているからこそ、母にあれこれ言われたくない気持ちがある。

美紀は実家から電車で一時間のアパートで一人暮らしをしている。そう遠くはないので、実家には月に一回は帰省している。アパートに帰る道すがら、美紀は母の運転する自動車の助手席に乗り、生まれ育った埼玉県北部の田舎町をぼおっと眺めていた。美紀が一人暮らしをしている都内に比べれば、別の国のように空が暗く星が多い。美紀は信号で停車する度に窓から覗く星の数を無言で数えた。
「美紀、あの人とはどうなったの？　お付き合いしていた人」
「別れた」
「そう」
積極的には話したくないことなので、美紀は適当に短く答えた。

母が言及したあの人とは、以前交際していた佐藤崇のことだとすぐに分かった。別れてもう一年半になる。
「仲良かったじゃない。お似合いだったと思うけど」
「やめてよ。その話は」
無言になると、コンパクトカーの狭い車内は余計に窮屈に思えて仕方ない。崇は大学の同級生で、大学の三年半と社会人になってから三年半、合計七年間交際していた。二人は二十六歳になっていたし、友人からはいつ結婚式の招待状をくれるのかとちゃかされていた。けれど、別れは突然やってきた。きっかけはつまらないことだったが、小さなひびが大きな亀裂となり、再び修復されることはとうとうなかった。美紀は別れる直前のやり取りを思い出す。
「まだ諦めないの？　公務員。もう五回も落ちてるのに」
「うん。やりたいことがあるから」
公務員になってやりたいこと？　口実でしょう？　結局安定とか、仕事が民間ほどシビアじゃないとこに惹かれているんでしょう？　もうちょっとでそう問いかけるところだったが、美紀はぐっと堪えた。
「何を、やりたいの？」
「もう利益ばっか考えるのは疲れちゃったからさ、利益度外視で働きたいんだよね。市民のために」
「……具体的に、何よ？　良く分からない」
「戸籍とか、住民票とか、道路とか、公的住宅とか、もうからなくて民間じゃできない、でも必要な仕事をやりたい」
「ふーん……。なんか、つまんないよね？　夢が公務員ってさ。落ち着いちゃってるっていうか」
「美紀は？　何になりたいの？」
そう問いかけられて美紀は答えることができなかった。就職活動の時、美紀は知名度や人気、福利厚生、給与などで就職候補を決めた。結果として誰もが知っている上場企業の一般職になれたのだが、手放しで満足な結果だとは言えない。自分がやりたいことが何であ

るのか、自分は何が得意なのか、社会にどんな形で貢献しているのか、美紀は胸を張って言い切ることができなかった。
「なに、それ」
「え？」
「あたしが、何の目標もなく生きてるって言いたいの？」
「そんなこと言ってないよ」
沈黙が訪れ、結局そのまま会話はなかった。その日は泊まらずに、自分のアパートに帰った。驚くべきことに、そんな些細なことがきっかけで二人は破局を迎えた。
「あたしのこと、馬鹿にしてるんでしょう？」
「美紀、俺の話も聞いてよ」
「公務員の彼女作ればいいじゃん？　税金泥棒同士さ？」
「何だよ。その言い方」
一緒にいた七年間が何の意味も成さなくなった気がして、美紀は心臓をえぐられるような強烈な虚しさを感じた。

祖母が入居するグループホームは二つのユニットに分かれている。各ユニットは定員九名で、祖母は二階のユニットで暮らしている。グループホームは特別養護老人ホームと違い、少人数で暮らす家庭的な雰囲気だ。大規模施設の機械的な介護に抵抗があった母が、このグループホームに決めた。祖母は軽い認知症を患っていたが、いつも静かにこにこしていた。物忘れはあったが、祖母はどこにでもいる九十過ぎのおばあちゃんだった。
「これ、何？」
祖母の部屋にある観葉植物についているそれを美紀は指さした。
「あら。今まで気付かなかったの？　三年前に入った時からあったわよ？」
「……だって、こんなに小さいし」
一見するとそれは七夕の時に笹に結ぶ短冊のように見えた。
「おばあちゃんが書いたのよ。入った時はちょうど七夕の時期だ

ったから」
美紀は短冊のような紙片を手に取った。筆書きで書かれているのだが、余りに達筆過ぎて読むことができない。
「何て、書いてあるの？」
美紀は母を見てから、祖母に視線を移した。祖母はベッドで寝息をたてている。
「中尉殿が、無事帰還されますようにって」
「え？」
「おじいちゃんよ。戦争で亡くなったおじいちゃん」
美紀の母方の祖父は戦死した。詳しくは知らないが、戦争で死んだことだけは聞かされていた。
「おじいちゃん。死んじゃったんでしょ？」
「そうね。でも、おばあちゃんは生きて還って来るって信じているのよ。だって、遺骨も遺品も戻ってきてないんだから」
祖母の寝顔を見ると、穏やかに、皺の一本一本をゆっくりと動かしながら眠っていた。静か過ぎてこのまま二度と起きることがないように思えたが、怖くなってすぐ想像をかき消した。

東京のアパートに戻って、美紀は手早く寝る準備を済ませてベッドに入った。翌日、連休明けで仕事に行かなければならないのを思うと気分が沈んだ。美紀はベッドから上半身だけ起こし、すぐ横の窓を開けた。冬の外気が風呂上がりの肌を一気に冷やし、火照りが心地良く治まっていくのを感じた。十二月の夜空は澄んだ空気に星が無数に輝き、都内でこんなに多く星が見えることを初めて知った気がした。
「あ。流れ星」
視界の左上から右下に向けて、流れ星が一つ落ちた。美紀はすぐさまぶたを閉じ、無言でつぶやいた。
―おばあちゃんがおじいちゃんに会えますように。

ジャンクフード

その夜、美紀は変な夢を見た。

美紀のアパートで、崇と二人休日を過ごしていた。交際して最初の、崇の誕生日だった。何故誕生日だと分かったかと言うと、美紀が初めてハンバーグカレーを作っていたからだ。崇は子供のような食べ物を好んだ。カレー、ハンバーグ、ラーメン。ジャンクフードばかりだと美紀は半ば呆れていた。たまに、服装に気を使わなければならないレストランなどに行っても、崇はぎこちなく落ち着きがなかった。

「なんか、味も何も分からないよ」

崇は決まってそう言った。せっかく美味しい物を食べに来ているのにそんなことを言われると、良い気分はしなかった。

崇の誕生日は彼の好きな物を作ってあげるのだが、いつの間にかハンバーグカレーを作るのが恒例になっていた。

「美紀の作ってくれたハンバーグは最高だよ。　カレーもおいしい。どうせだったら両方味わいたいから、ハンバーグカレーを作ってよ！」

そんないきさつがあって誕生日はハンバーグカレーを作ることになってしまった。外食でハンバーグを食べると、崇はいつも「もっと大きいのを食べたいな」と言っていた。美紀はほとんどやけくそになって、一キログラムの合挽肉を全部使ってハンバーグを作った。フライパン一杯に広がった肉の塊を、美紀は渾身の力を振り絞ってひっくり返して仕上げた。出来上がったそれをカレーライスに乗せると、大皿からはみ出してしまった。

「はい。出来上がり」

「……」

余りの迫力に声も出せないのか、崇は圧倒されて目の前の料理をただ見ていた。けれど、おもむろにスプーンを手に取って食べ始め

た。
「うまい。うまいよ！」
崇はむさぼるように食べた。時間をかけて何とか食べ切ったが、翌日は一日のほとんどを布団の中で過ごさなければならなかった。
「無理、しなくていいのに」
「無理してないよ。おいしかったもん」
「馬鹿」
ひどい胃もたれで崇は廃人のように寝転がっていた。
「来年こそは……」
「え？」
「来年こそは……来年こそは……」
翌年から、誕生日の度に美紀が作った巨大ハンバーグカレーに挑んだ崇だったが、毎年打ち負かされていった。夕食に食べるそれのために朝食、昼食を抜くと、胃袋が小さくなってしまって太刀打ちできなかったし、かといって朝食と昼食をしっかり食べると胃袋が一杯でまともな戦いができない。
「来年こそは……来年こそは……」
崇の口癖も恒例になった。にんにくをたっぷりと入れたり、とろけるチーズを一袋使ったり、美紀はいたずらを企む子供のようにボリュームたっぷりのハンバーグを作り、誕生日を迎えた崇に常勝を続けていった。

「あはは……ほんと馬鹿なんだから」
美紀は自分の独り言で目を覚ました。冬の遅い朝が窓から薄暗く差し込み、部屋をぼんやりと照らしていた。思い返してみればそんな付き合いだった。気取ってはないし、格好良くもないし、人の見本になるカップルじゃない。それでもハンバーグ一つで馬鹿みたいに競い、大笑いし、心の底から楽しめる二人だった。まだ未練を捨て切れていないことを美紀は痛感してしまった。
「あ……れ？」

美紀は足元に二人の人影を見た。一人は真白の服を着て、もう一人は髪の長い女性のようだった。表情は良く分からなかったが、二人は美紀に向けて笑いかけているように見えた。まだ眠っているのかと思い、美紀は上半身を起こしてカーテンを開けた。朝日が細長く差し込み、意識ははっきりとしていて、眠ってなどはいなかった。人影はすっかりなくなっていた。

不思議な朝だった。けれど時間がなかったのですぐに出勤の準備に取り掛かった。寒がりの美紀は冬の朝が辛い。その日は暖房のタイマーをかけるのを忘れていて、着替えるのが億劫で仕方がなかった。けれど、つけたばかりの暖房がまだ部屋を暖めていないというのに、美紀は布団から出て着替えを始められた。テレビで気象予報士がその冬一番の寒さだと言っているのが信じられない。ふんわりと包み込むような熱を、美紀は身体の周りに感じた。本当に不思議な朝だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8162z/

十二月の織姫

2011年12月26日23時52分発行